

ものごとをシンプルに見せる  
「ろう文化」に美しさを感じます。

日本学術振興会特別研究員  
しづや ともこ  
澁谷 智子さん

聞き手 編集部



「コーダ」はChildren Of Deaf Adultsの頭文字（CODA）で、聞こえない（ろう者）親を持つ聞こえる子どもたちのこと。そんなコーダたちの独特の世界観を著書『コーダの世界』（医学書院）で描いた澁谷智子さん。社会学・比較文化研究を専門とされる澁谷さんに、ろう者の世界観や障害の概念、コーダへの支援などについてお話を伺いました。

「聴文化」と「ろう文化」

「コーダの世界」では、音声言語を使う聞こえる人（聴者）のコミュニケーションのあり方は普遍的なものではなく「聴文化」であるとして相対化し、ろう者には「ろう文化」があることを浮き立たせました。とても興味深い指摘と思いましたが、「ろう文化」のどんなところに魅力を感じますか。

澁谷 ろう者は非常に表現力が豊かです。手話をしているときにも、目や空

間の使い方が絶妙で、まるで演劇を見ているような臨場感があります。相手が話を理解しているかを確認する間の取り方も私には心地いいんですね。

ろう者はものごとをシンプルに表現する能力も優れています。手話では英語と同じように始めに結論を持ってきて、後から「なぜならば」と説明します。常に全体像が見えるような説明に重きを置いて表現していきます。また、ろう者は見通しの良い空間が好きなので、ろうの建築家は視線が行き来しやすい設計にこだわります。こうした建造物は聞こえる人たちにとっても快適な空間のはずです。

PROFILE ●しづや・ともこ●

1974年生まれ。東京大学教養学部卒業、ロンドン大学ゴールドスミス校大学院社会学部 Communication, Culture and Society 学科修士課程、東京大学大学院総合文化研究科修士課程・博士課程で学ぶ。学術博士。現在、日本学術振興会 特別研究員として、東京大学大学院総合文化研究科 国際社会科学専攻に籍を置く。立教大学ほか非常勤講師。専攻は社会学、比較文化研究。

ろう者のシンプルで分かりやすい表現方法には美しさを感じますね。

「ろう者は弱者という認識が一般的にあると思いますが、「ろう文化」という言い方には「弱者ではない」というニュアンスが感じられます。

**澁谷** 私は学生時代からろう者と接してきましたが、彼らに対して弱者というイメージを抱いたことは一度もありません。交換留学制度でアメリカに留学したとき、ろう者のコミュニケーションに行く機会がありました。アメリカ手話がよく分からない私に対して周りのろう者たちが非常に良く面倒をみてくれました。そのときは、弱者は私、という感じでした。そんな経験があるので誰が弱者なのかは場所により簡単に裏返るものだと思います。

ただ、ろう者が置かれている現状をみると、視覚的に情報を100%得られる環境で教育を受けることが保障されておらず、大学進学率が低くなっているとか、その結果、高収入の職業に就く機会が限られるなど、二次的な理由で社会的に弱い立場になりやすいということはあると思います。

聴覚障害という言葉も、ろう者にとってはピンときません。そもそも音の間近親結婚が繰り返されました。その結果、ろう者が生まれる確率がものすごく高くなり、19世紀半ば、島のあちこちでは聞こえる人と聞こえない人の割合が4対1になったこともありました。多くの島民が聞こえないので、島では手話を覚えないと生活できません。職業も、結婚も、子どもの数も、経済力も、聞こえる人と聞こえない人でまったく違いのない社会となりました。

こうした特異な社会であったため、後に文化人類学者が調査をするようになります。現地の高齢者たちにインタビューをする中で、「漁の上手なデイベッドさん」の話が出るのですが、インタビューが「もしかして、そのデイベッドさんは聞こえない人ですか？」と確認すると、「ああ、言われてみればそうでした」と気づいたという話があります。島民には「漁の上手なデイベッドさん」のイメージしかない

声日本語での「障害」と手話での「障害」では、言葉の使い方がやや違うのです。一般的にはまず「障害者」というカテゴリーがあり、その中に視覚障害や聴覚障害、身体障害などが入ってきます。手話では、「障害」より先に「聞こえる、聞こえない」という二分法があるので、例えば視覚障害者は「あの人は見えないけれど、聞こえる人」となります。ろう者にとって聞こえないというのは、「障害」というよりは言語の違いであり、コミュニケーションの問題なのです。

—コードも、聞こえないことをあまり障害としてとらえていませんね。

**澁谷** これは教育の問題が大きいと思います。今は、聞こえない人、見えないう人たちを特別な存在として教え込むような教育になっていますが、コードのように小さいころから聞こえない人

くて、聞こえる、聞こえないということとは意識していなかったのです。

コードにもそれに近い感覚があったて、ごく小さいころには、手話か口話か、どちらで話していたのか、あまり意識していないといえます。

—ろう者の日本語力の上達という面ではいかがでしょうか。

**澁谷** 環境に大きく左右されると思います。

に慣れ親しんでいけば違和感はないのです。

障害学では周りの人たちがその人を「障害者」として見ることによって、二次的に不利な状況に置かれることを「ディスプレイ」といい、心身の機能障害（インペアメント）と区別します。ディスプレイは社会のシステムがつくっている問題です。人と人のかかわり方で障害のあり方も変わっていくのです。コードの存在などもその良い例ですね。

### 「聞こえない」の 当たり前の島

**澁谷** これには典型的な例がありません。アメリカのマサチューセッツ州の沖にマーサズ・ヴィンヤードという島があります。17世紀にイギリス人入植者たちが上陸してきましたが、大陸から隔離されがちだったこの島では、長

ます。ヨーロッパでは18世紀くらいから言われてきたことですが、ろう者は教育体制が整っていけば普通に知能を発揮できるようになります。ただ、音声を一方向的に押し付けて、きれいな発音で話せるようになることを最優先するような教育をしてしまうと、学力が十分に身につかないということがあります。口の形の読み取りや残存聴力の活用だけで日本語の言語運用力を獲得するのは、難しい面もあります。

## コードの世界 ～手話の文化と声の文化～

A5判 / 248頁 / 2,100円 (税込み)  
医学書院

ろう文化と聴文化の間を行き来するコードたちが体験する異文化間ギャップに焦点を当てるとともに、コードと聞こえない親との親子関係も描く。



しかし、比較的若い世代のろう者は、インターネットやメール、携帯などを用いて必要な情報を得るのが格段にうまくなっているということはいえると思います。

## ろう者にとつて 適切なサポートとは？

—保健師は乳幼児健診で聞こえないおあさん、もしくは子どもの聞こえが心配なケースにかかわることがあります。ろう文化を知らないと行き違いが生じるように思いますが、その点はいかがでしょうか。

**澁谷** 親がろう者で子どもの聞こえが懸念されるケースでは、「早く聴覚検査を受けさせたほうがいい」とおっしゃる保健師さんもいらっしゃるようです。これは「聞こえない」ことを多くの方がいけないことと思っているか

てはいささか気の毒なことかもしれません。特に都市部の若いろう者たちには、そういう傾向が強いようです。例えばコーダだと、学校などでは音声日本語に接する時間のほうが長く、親子で手話で十分に気持ちを伝え合えないこともあります。ろうの親子ならそんなこともなく、ずっと自分と同じ世界を共有できる喜びがあるからだと思います。

自分はどう者であることをそれほど悪いとは思ってないにもかかわらず、周囲から「お子さんが聞こえて良かったですね」と言われると自分を否定されているような気持ちになります。聞こえる子が生まれて、「言葉の習得はおじいちゃん、おばあちゃんに協力してもらおうほうがいい」と言われると、凹みます。これから子育てをしようという敏感な時期なので、周囲の人たちは思い込みで言うのではなく、正確な情報を伝える気遣いが必要だと思います。



らですが、ろう者の中には、聞こえない子どもが生まれることを歓迎する人が少なくないのです。

—誇張ではなく本当にそうなのですか？

**澁谷** 本当です。なぜかという、自

す。行政が介入するときには、聞こえる人と聞こえない人が暗黙のうちに持っている価値観が違うというのを理解しておかないと、お互いの期待がずれるといふ不幸なことが起きてしまいます。

親が聞こえる人で子どもが聞こえない場合にも、こうしたずれは起きています。例えば専門職が一生懸命発声練習をさせ、聞こえない子が「おかあはーん」と言えるようになり、それを聞いたおあさんが感動したという話があります。でも、自分の出した声を聞くことのできない子どもにしてみれば、「おかあはーん」と発声できることにどれほどの意味があるのでしょうか。子どもが必要としていることはほかにもあります。誰のための訓練なのかを考えなくてはいいと思います。

—手を差し伸べたつもりが余計なお

分と同じ経験を共有できるし、培ってきた人脈や経験がすべて子育てに生かせるからです。ろう者が聞こえる子どもを育てるのは、聞こえない子を育てるよりも大変な面があります。

ろう者の親の中には「子どもはできれば聞こえない方がいい」と公言している人もいます。これはコーダにとつ

せつかいだったということが結構あるわけですね。

**澁谷** ありますね。実は、ろう者が「あの人、聞こえる人だから」と表現する中には「なんでもやってくれようとする人」というニュアンスが含まれているのです。私はそれを知ってから、自制するようになりました。ろう者と一緒にファミリーレストランに入っても、代わりに注文するようなことは極力しないようにしています。手話を勉強している人たちなら、ろう者に必要以上に手を貸すのは良くないことを知っていると思います。

手話通訳のあり方も、今はろう者が言っていることを正確に伝えるのが良い通訳であって、かつてのように翻訳しすぎたり、よかれと思って通訳者の判断で情報を足したり引いたりするのは良くないとされています。

周囲の理解がなくて「あなたは何も

しない方がいい」という環境だったら、経験できることが限られてしまいますし、責任とかやりがいも小さくなってしまいます。

自分が同じ立場だったらどう思うか。例えば子育てで「大丈夫なの？ 代わりにやってあげようか」と言われたらすごく嫌ですし、自分にできることはできると認めてほしいですよね。たいへんな面があれば、それを部分的にサポートしてほしい、一緒に頑張って考えてほしいと思うはずですよ。

ところが困ったことに、今の環境はあまりそうなっていないですね。ろう者は「こういうサポートがあるといいな」と思っている、それを言うと駄目な親に見られてしまうのではないかと恐れ、口に出せずに一人で頑張ってしまうところがあるのです。

こうしたことはかなり多いと思うのですが、研究対象にもなっていないので実態は明らかではありません。行政

す。彼らはサポートを必要としているのでしょうか。

**澁谷** 私は絶対にサポートが必要だと思っています。コーダは周囲の人から「オーバリアクションの人」とか言われたり、「自分はちょっと変わって

の側は、ゼロか百かではなくて、ろう者の親としての能力を十分に評価した上で、どの部分をどう補えばもっと効果的な育児ができるのかを考えることが大切なのだと思います。

### 健常と障害を分ける規範が揺らいでいる

**澁谷** イギリス政府のホームページを見ると、障害者への情報提供のところで「あなたが子どもを持ちたいと思ったら」というコーナーがあります。

そこでは母体の状況を考慮した妊娠計画、出産後の医療サービス、地方自治体からのサポートなどについて書かれています。育児についても、軽量で車椅子につけられるベビーカーなどの用具紹介や、学校は親が子どもの教育に完全にかかわれるようアクセスを保障する義務を負っているなどの情報まとめられています。

いるのかな」と思ったりしつつも、それがなぜなのかよく分からないまま、イライラを抱えて思春期を過ごすことが多いのです。

聞こえない親のもとで聞こえる子どもが育つ過程について、適切な時期に適切な説明をきちんと受けられれば、

コーダのモヤモヤ感もかなり解消されるはずですよ。

— 今後の研究テーマは？

**澁谷** 一つは今お話ししたように障害というものとらえ方です。障害があっても親の介護をしたり、育児をしたりしている人はたくさんいる

障害者は特別な人ではなく、普通に家庭生活や社会生活を送る人として描かれていて、どうしたらその人たちが親の役割を果たしやすいのかという視点なのです。いまだに「障害者は結婚などできるの？ 収入はどうするの？」と考えてしまう日本と比べると、相当違うなという印象を持ちました。

しかし日本も長寿社会となり、いろいろな問題を抱えながら生きていく人が増えている中で、健常と障害を分けていた規範が揺らぎつつあります。これから「障害」のとらえ方は、どんどん変わっていくと思います。

### コーダもサポートを必要としている

— 『コーダの世界』で描かれているコーダたちはとても明るいのですが、一方で聞こえない世界と聞こえる世界の間で生活することでの悩みを抱えています。

のに、なぜそこがクローズアップされていないのか、なぜケアの受け手としてしか見られていないのか、私は以前から疑問に思っています。

それから、本来なら大人が担うべき役割を子どもが担う場合、子どもや家族にどのような影響を及ぼすのに関心があります。

イギリスでは家族のケアをする子どもを意味する「ヤングケアラー」という言葉があります。イギリスには約17万5000人いるとされ、彼らに対する支援も進んでいるのですが、子どもなのにケアをせざるを得ない場合、大人なら簡単に得られる情報を得にくかったり、学業や友人との交流に十分な時間を割けなかったりといういろいろな問題を抱えることとなります。最終的には制度の問題に行き着くはずですが、このあたりのことも今後研究していきたいと思っています。

